終わりなき労働と努力の果てに

第1章〜第8章 日本語訳まとめ

収録章

第1章 終わりなき知識のゆりかご

第2章 終わりなき彷徨の答え

第3章 終わりなき偏見の悲しみ

第4章 終わりなき思考の流れ

第5章 終わりなき挫折の連続

第6章 終わりなき反復の輪

第7章 終わりなき線路の終点

第8章 終わりの向こうには

CHAPTER 1

終わりなき知識のゆりかご

レヴィ

バリエ、どうかな？

レヴィ

今回は本当に頑張ったんだよ！ この論文、いつもとちょっと違うでしょ？

バリエ

うーん……

バリエ

ねえレヴィ、必死なのは分かるけど……まだ読んでる途中だから、少し静かにしてくれる？

レヴィ

う、うん。分かった。

バリエ

論文の内容自体は、まあまあ悪くないんだけど……

レヴィ

悪くない？ 本当？ じゃあ私もついに、正式な魔女になれるの？

バリエ

たぶん、そうはならないと思うよ。

レヴィ

ど、どうして！？ 内容は悪くないって言ったじゃん！

バリエ

内容は悪くないよ。悪くはないんだけど……

さらっ、さらっ……

バリエ

参考文献が、40個以上もあるじゃない。

バリエ

参考文献の表記だけで1ページを超えるって、普通だと思う？

レヴィ

もう通った論文に書いてある部分を参考にしたんだから、悪いわけないでしょ！

レヴィ

そ、それは仕方ないことなんだよ！

レヴィ

論文に何を書いても、他の魔女たちが研究し尽くしてるせいで内容がかぶっちゃうんだから。

レヴィ

私、一生バイトだけして終わるんだよ！ ううっ！

バリエ

いくらなんでも、これはやりすぎだよ、レヴィ。

バリエ

この図書館にある本や論文から文章を切り貼りしたら……

バリエ

もう一本、この論文が作れそうなくらいだよ？

レヴィ

くっ、バリエの言ってることが間違ってるわけじゃないけど……

レヴィ

私だって、好きでこんなことしてるんじゃないんだよ！

レヴィ

今まで参考にするために読んだ論文が、何本あると思ってるの？

レヴィ

あの論文を積み上げたら、魔女王国から世界樹のてっぺんまで届いて、まだ余るくらいなんだから！

レヴィ

もう、自分でも何が何だか分からないよ。

レヴィ

論文を読みすぎて、書きすぎて、どこまでが自分の論文で、どこからが参考文献なのかも分からなくなってきたし。

レヴィ

頭の中がぐちゃぐちゃで、論文を書いてても自分で何を書いてるのか分からないし……

レヴィ

この前なんて、本当に純粋に研究した内容だと思って出したのに、もうある内容だからって盗用扱いで警告まで受けたし……

レヴィ

バイトもしなきゃいけないし、論文も書かなきゃいけないのに、徹夜で参考文献の調査と照合までして……

レヴィ

いくら私でも、もう限界だよ！

バリエ

お、落ち着いて、レヴィ。言いすぎたのは、まず謝るよ。

バリエ

君の言う通り、他の魔女たちが積み上げてきた知識は、とんでもなく膨大だからね。

バリエ

レヴィ、論文が学術誌に載るっていうのはね……

バリエ

魔女たちがすでに広げてきた知識の大地。その境界線を突き破って、さらに土地を広げたって意味なんだよぉ。

バリエ

ほんの少しでも自分だけの領域を持っていて、初めて正式な魔女として認められるんだ。

レヴィ

自分だけの……領域？

バリエ

そう、その通り。他の魔女たちは、そうやってきたんだよ。

バリエ

参考文献っていうのは、その論文を書いた魔女が切り開いた場所まで、すぐにたどり着くための案内書みたいなものでしょ？

バリエ

これまで魔女たちは、お互いの論文を参考にしながら、新しい領域を広げてきた。

バリエ

でも、あらゆる魔女たちが魔法という大地を掘り尽くしてしまって、もう開拓する場所がないのだとしたら……

バリエ

レヴィ、君には少し違う方法が必要なのかもしれないねぇ。

レヴィ

どんな方法？

バリエ

そんなに特別な方法じゃないよ。

バリエ

まったく新しい知識を探すか、作り出すんだ。

レヴィ

……

バリエ

ねえレヴィ、そんな目で見つめないでくれる？

バリエ

既存の論文のせいで頭が痛いなら、いっそ全部忘れてしまうのも一つの方法かもしれない、ってことだよぉ。

レヴィ

バリエ。助言してくれるのはありがたいけど……

レヴィ

それができるなら、私が今まで見習い魔女のままだったわけないでしょー！

バリエ

は、ははは〜。まあ、とにかく私から言えることはもうないかなぁ。

レヴィ

ううぅ……はあぁ……。

レヴィ

とにかく、ありがとうバリエ。私、またバイトの時間だから、そろそろ行くね。

バリエ

論文の確認ならいくらでもしてあげるから、必要になったら図書館においで。

レヴィ

うん……。

場面転換：UFCの店

レヴィ

いらっしゃいませ、UFCでぇす……。

迷惑な客

何だよお前、「アンダーグラウンド・フライド・キャロット」って言わないのか？

迷惑な客

接客の挨拶を略したら、バイト代でも節約できるってのか？

迷惑な客

サービスなんて金もかからないんだから、ちゃんとやれよ！

レヴィ

ご注文は？

レヴィ(心の声)

私だけの領域、私だけの論文か……正式な魔女になるには、私はいったいどうすればいいんだろう。

迷惑な客

はあ？ 今、私の話を無視したか？ ここの社員教育どうなってんだよ？

レヴィ

従業員教育に関するご意見は、出口右手の「魔女の声箱」までお願いいたします。

レヴィ

ご注文はございませんか？

レヴィ(心の声)

煮詰まりきったこの地下魔女王国に、新しいものなんてあるわけないよぉ……。

迷惑な客

おい！ 最後まで私を無視す――

別の客

おい、そこ！ ここにいるのはお前だけじゃないんだぞ！ さっさと注文してくれないと、こっちも注文できないだろ！

迷惑な客

ちょっと黙ってろ！ 今、この店員の勤務態度がめちゃくちゃだって話をしてるんだよ！

迷惑な客

見えないのか？ 体の半分を厨房に、半分をカウンターに突っ込んで、ニンジンをひっくり返しながら注文を取ってるんだぞ！

迷惑な客

こんな接客態度が許されると思うか？ こんな店で売ってるニンジン、お前は食べるのかよ？

別の客

食べるから早くどけって言ってるんだよ！ そっちこそ、この子が一人で働いてるのが見えないのか？

別の客

ああやってすぐニンジンを出してくれるから、みんなここに来てるんだろ。お前のせいで時間がかかってるんだよ！

レヴィ

ご注文がないようでしたら、次のお客様をお受けしまぁす……。

迷惑な客

くっ。ニンジンスティック一つよこせ。

レヴィ

はい、お客様。

少しして――

レヴィ

ニンジンスティック一袋、お待たせしました。

迷惑な客

ちっ。覚えてろよ。UFCの「魔女の声」に全部書いてやるからな……。

レヴィ

いらっしゃいませ、UFCです。ご注文は……。

レヴィ(心の声)

新しい論文、新しい論文……うう、バイトに集中できない……。

別の客

すみません、ニンジンスティックって冷たくできますか？

レヴィ

は、はい！？ 冷たく、ですか？ それは〜、ちょっと難しいですねぇ？

別の客

うっ。やっぱり無理ですか。

レヴィ(心の声)

大変だ。初めて見るタイプの迷惑客だ！

レヴィ(心の声)

冷たいニンジンスティックって、そんなものどうやって作れっていうの……。

レヴィ(心の声)

「魔女の声」にクレームを入れられる前に、何とかしないと。

レヴィ

保管中の冷凍ニンジンスティックならありますけどぉ……。

別の客

本当ですか？ それで大丈夫です！ じゃあ、それをください。

レヴィ

ほ、本当にそれでいいんですか？ いったい何に使うんです……？

別の客

ああ、今、精霊山の賢者様が教団に滞在していまして。

別の客

ちょっと相談したいことがあるんですが、冷たい食べ物がお好きだと聞いたので、お出ししようと思って。

レヴィ(心の声)

精霊山の……賢者様？

レヴィ(心の声)

魔女王国の外にいながら、宮廷魔女以上に魔女社会で高く評価されている方……。

レヴィ(心の声)

その方なら、もしかしたら……何かまったく新しいものを知っているんじゃないかな？

レヴィ

そうなんですね。教えてくださってありがとうございます。

レヴィ(心の声)

バイトのせいで精霊山まで行く余裕はないけど、ちょうど賢者様が教団にいるなんて！

レヴィ(心の声)

この機会を逃したら、次にいつ賢者様に会えるか分からない。バイトが終わったら、すぐ行ってみよう。

レヴィ(心の声)

UFCのバイトが終わって、ポーション配達が終わって、材料採集と、露店と、それから……。

レヴィ(心の声)

お、終わるまで賢者様……教団にいてくれるよね？

CHAPTER 2

終わりなき彷徨の答え

レヴィ

こんな時間に会ってくださってありがとうございます。精霊山の賢者様。

アヤ

ふふ。あなたこそ、こんな時間にここまで来るなんて……珍しいこともあるものね。

アヤ

みんなが寝静まった夜更けに、魔女がひとりでいる部屋の扉を叩いて……聞きたいことがある、だなんて。

アヤ

そんなに私のことを……いろいろ知りたいのかしら？

レヴィ

え、ええっ！？

レヴィ

そ、そういうわけでは、ないんですけどぉ……。

アヤ

そう？ そうなのね。じゃあ、ひとまず入って。ベッドしかない部屋だから、ここに座ってもらうことになるわ。

アヤ

今夜は、ずいぶん長い夜になりそうね。

アヤ

この上で一緒に、お互いの心を確かめ合う時間にしましょうか。

レヴィ

は、はい……。

レヴィ(心の声)

ううっ、賢者様は言い回しが変だって噂には聞いてたけど、こういう感じだったなんて！

レヴィ(心の声)

と、とにかく、用意してきたあれを渡そう。少しは空気がよくなるはず。

レヴィ

賢者様、あの……遅い時間なんですけど、少し食べ物を持ってきたんです。

アヤ

食べ物？

レヴィ

はい。これです。

レヴィ(心の声)

この状態でもおいしいかは正直分からないけど、賢者様がお好きだって聞いたし、大丈夫だよね？

アヤ

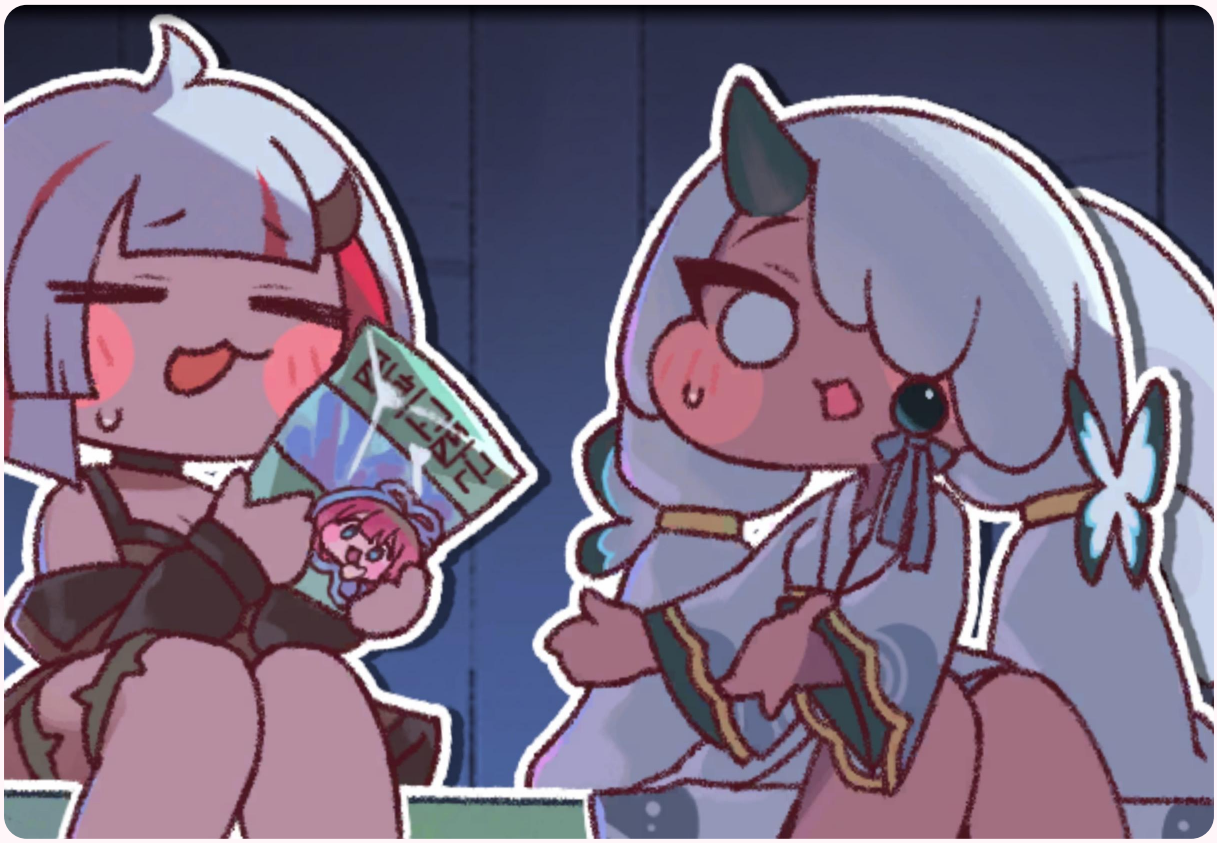
こ、これは……？

レヴィ

ニンジンスティックです。地下の魔女たちには大人気の食べ物なんですよ。

アヤ

ああ〜、そう……なのね？



レヴィ

冷たい食べ物がお好きだって聞いたので。

アヤ

たしかに、アイスクリームみたいに冷たい食べ物が好きなのは間違いないのだけれど……。

アヤ

凍ったニンジンスティック……これ、揚げる前のものではないかしら？

アヤ

あ、ええ！ よく分かっているのね。私のために、気を遣って用意してくれたのね？

アヤ

ふふ……本当にありがとう。

アヤ

でも、どうしましょう。もう時間も遅いし、あまりお腹も空いていなくて……。

レヴィ

うっ、そうですよね。私、また空気を読めませんでした。

レヴィ

申し訳ありません、賢者様。私、いつもこうなんです。

レヴィ

賢者様への贈り物なのに、バイト先で余った食べ物を包んで持ってくるなんて……。

レヴィ

こんな魔女だから、私はいまだに正式な魔女になれないんですよね。ううっ……。

アヤ

そ、そんなことはないわ！ たぶん……違うと思うけれど？

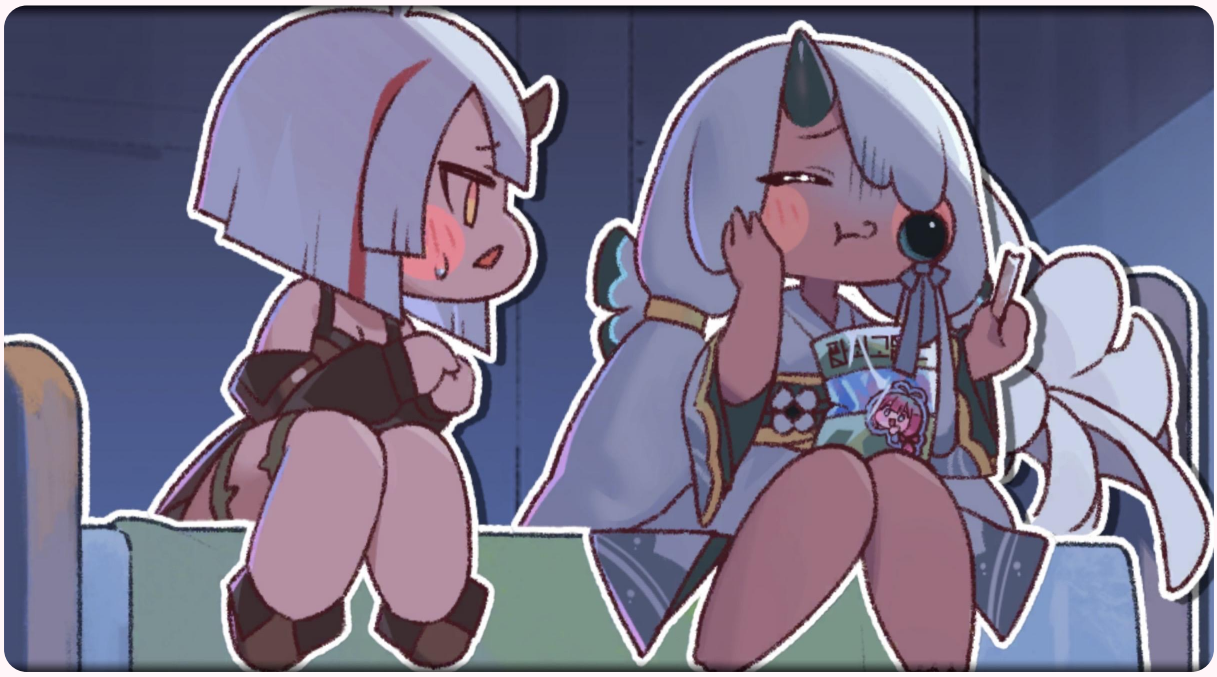
アヤ

そういえばレヴィ……ずいぶん長いあいだ見習い魔女をしているのよね。つらいことも多かったでしょう。

アヤ

このままにはしておけないわね。何とかしないと……。

ボリッ！



アヤ

ん〜、おいしい！ こんなに冷たいニンジン、初めて食べたわ。ほっぺたがひんやりする〜！

レヴィ

け、賢者様？

アヤ

今まで食べたニンジンの中で一番おいしいわ。温度もちょうどいいし。

ボリボリ、ボリボリ。

ごくん。

レヴィ

味は……大丈夫でしたか？

アヤ

う……うん！ おいしいわ。あまりお腹は空いていなかったけれど、ちょうど軽くつまみたい気分ではあったの。

レヴィ

そうだったんですね！ 本当によかったです。

アヤ

そうでしょう？ ふふ、ふふふ……。

レヴィ(心の声)

まさかとは思ったけど、本当においしそうに食べてる。よかった……って言っていいのかな？

レヴィ(心の声)

賢者様の話し方とか食べ物の好みとか……噂では聞いていたけど、実際に見るとなんだか変だ！

レヴィ(心の声)

あ、違う違う。私は新しいものを得るために来たんでしょ？ まずは偏見を捨てなきゃ。

レヴィ(心の声)

精霊山の賢者様と呼ばれているのには、きっと理由があるはず！

レヴィ

あ、あのー！

アヤ

んむ……なあに？

レヴィ

実は私、まだ見習い魔女でして。魔女論文について聞きたいことがあって、こうしてお訪ねしました。

アヤ

なるほど、論文ね……。見習い魔女にとっては、とても大事なことだわ。

アヤ

でも、どうしましょう。その問題については、私は力になれないと思うの。

レヴィ

え……どういうことですか？

アヤ

私は、正式に論文を提出した高位魔女ではないから。

アヤ

魔女たちが複雑な論文で階級を分けていることは知っているけれど……。

アヤ

私は魔女たちの集団に属しているわけでも、論文を出したことがあるわけでもないの。だから、あなたの力になるのは難しいわ。

レヴィ

でも……賢者様は、すべての魔女たちから賢者として称えられ、認められている魔女じゃないですか！

レヴィ

何か新しい魔法とか、革新的な理論をご存じだったりしないんですか？

レヴィ

私も賢者様みたいに……魔女社会で認められたいんです！

レヴィ

私は、いったいどうすればいいんでしょうか？

アヤ

うーん……私自身は力になれないけれど、名のある魔女に助言を求めたのは賢明だったと思うわ。

アヤ

ただ、論文についての助言なら、私よりも王国にいる魔女たちに聞いたほうがよさそうね。

アヤ

フリックルやシェラム、マカシャのような宮廷魔女たちに、助けを求めてみるのはどうかしら？

レヴィ

その方たちの論文なら、もう数えきれないほど読みました。

レヴィ

私だけの、まったく新しい論文が必要だから、賢者様を訪ねてきたのに……。

アヤ

論文を読むことと、著者本人から助言を聞くことは違うはずよ。

アヤ

論文の内容ではなく、それを書くときにどんな方法を使ったのか、どんな考え方で取り組んだのか……。

アヤ

テーマをどう選んだのか、解決するまでにどんなことがあったのか。そういう話を聞けば、役に立つのではないかしら？

アヤ

きっと、学べることは多いはずよ。

レヴィ(心の声)

内容ではなく、過程を学ぶ……。たしかに、その通りだ。やっぱり賢者様なのかな？

レヴィ

分かりました。宮廷魔女たちに助けを求めてみます。

アヤ

少しでも役に立てたなら、よかったわ。

アヤ

また助けが必要になったら、いつでも精霊山の頂上までいらっしゃい。私はだいたい、そこにいるから。

レヴィ

はい、賢者様。本当にありがとうございました。

数日後——

レヴィ(心の声)

ううう〜、サツマイモ揚げの配達。今日のバイトもこれで終わりかな……。

レヴィ(心の声)

この前、賢者様に助言してもらった通り、頑張って時間を作って宮廷魔女たちを訪ねてはみたけど……。

レヴィ(心の声)

あまり役に立つ助言は聞けなかった。

レヴィ(心の声)

最初に訪ねたシェラム書記官は……。

シェラム

この論文を執筆するとき、どんな心構えで書いたのか、ですか？

シェラム

ということは、まさか……この論文がどういう論文なのか分かったうえで持ってきたのですか？

レヴィ

え？ どういう……論文か、ですか？

レヴィ

それは、これは……。

シェラム

この論文の読み方に気づいてしまったのなら、仕方ありませんね。

シェラム

これも私の黒歴史のようなものですが、気づかれてしまった以上、お教えしましょう。

シェラム

普通に読めば、魔法に関する理論をまとめた平凡な論文に見えますが……。

シェラム

2ページ目から、縦に読んでみてください。

レヴィ

は、はい！？ 分かりました。え、ええと……。

レヴィ

女・王・よ。あ・な・た・は・知・っ・て・い・る・か。幽・霊・は・カ・ボ・チ・ャ・を・食・べ・な・い……。

レヴィ

こ、これは！？

シェラム

ずいぶん驚くのですね？ これに気づいたから、私を訪ねてこの論文について聞いたのではありませんか？

シェラム

この論文のあちこちには、こうして暗号が隠されているんです。

シェラム

はあ、これが見つかって論文が落とされかけましたが……きちんとした論文ではあったので、何とか通りました。

シェラム

私を訪ねてきたのは、他の暗号が気になったからでしょう？ 読み方を教えて差し上げます。

シェラム

3ページ目からは斜めに読んで、その次は逆に戻って下から読み直して、それから……。

レヴィ(心の声)

どうしてそんなことができるの！？ 魔女社会って、本当に煮詰まってるんだ。論文でそんなことまでできるなんて……。

レヴィ(心の声)

こういうことができれば確かにインパクトはあるだろうけど、普通の論文でさえ難しい私には無理だよ。

レヴィ(心の声)

次に訪ねたマカシャ様は……。

マカシャ

ん？ 論文を書くときは、どうやって書けばいいのかって？

マカシャ

そうだね〜、うーん……紙に万年筆で書けばいいんじゃないかな？ い〜ひひ！

レヴィ

そういうことを聞いてるんじゃないんですけど……。

マカシャ

違うの？ じゃあ……あっ！ エルフたちが使ってるタイプライターみたいなのを使うとか？

マカシャ

キーボード……っていうのもあったかな？ 便利そうではあるけど、私は昔からのやり方のほうが楽でね！

マカシャ

もし論文をまた書くなら、やっぱり万年筆で書くと思うよ〜！

レヴィ

マ、マカシャ様……。私は論文を「書く」方法じゃなくて……「論文を」書く方法が知りたいんです。

レヴィ

正式な魔女になりたくて、論文の内容を作る方法について悩んでいるんです。

マカシャ

あ〜、あ〜、あ〜、そういうことだったのかい？ ちょっと冗談を言ってみただけだよ〜！

マカシャ

論文の内容ねえ……？

マカシャ

まあ、何というか……勝手に頭の中から出てくるものじゃないのかな？

レヴィ

勝手に……出てくるんですか？

マカシャ

うん！ 私はね、論文を書くときに悩むってことをしたことがないんだよ〜。

マカシャ

何か新しい魔法理論を思いつこうとすると……。

マカシャ

ちょっと待って。そういえばこの前……妖精王国のパン屋に行ったとき、本棚に並んでいた本の中に面白いやつがあったね。

マカシャ

あのとき見た妖精魔法の理論……あれをこうして、ああして、こういう観点から応用してみたら……。

マカシャ

いける。いけそうだ！ よし、すぐ試してみよう！

マカシャ

おい、レヴィ！

レヴィ

は、はい？

マカシャ

悪いんだけど、今ちょうどひらめいちゃってね。少し研究しに行ってくるから、答えはまた今度にするよ！

マカシャ

それじゃあね！

レヴィ(心の声)

ううう……はあ〜。マカシャ様からは、たぶん私みたいな見習い魔女に分かるような助言は出てこなさそう。

レヴィ(心の声)

じゃあ、残っているのは……。

レヴィ(心の声)

フリックル……様か。少し、怖いな……。

レヴィ(心の声)

ちょうどサツマイモ揚げの配達バイトも終わりかけだし、少し包んで持っていこう。

レヴィ(心の声)

今度こそ、ちゃんとした助言が聞けるといいんだけど……。

――次のお話へ――

CHAPTER 3

終わりなき偏見の悲しみ

フリックル

くうぅ……ようやく退勤か。仕事が本当に終わらないな。

フリックル

このうんざりする仕事の山は、いったいいつになったら片づくんだ？

フリックル

とはいえ、私が働かなければ、その分苦労するのは結局ベリータ女王陛下だからな。仕方ない。

フリックル

女王陛下を補佐する他の宮廷魔女たちにも、それぞれやるべき仕事があるわけだし。

フリックル

はあ……少しストレスを発散したいところだが。いや、まずは休むべきか……？

レヴィ

フ、フリックル様？ こんばんは。

レヴィ

よかった！ フリックル様の退勤時間に間に合った！

フリックル

ん？ お前は……レヴィか。

フリックル

こんな時間に訪ねてくるとは珍しいな。サツマイモ揚げを配達に頼んだ覚えはないが？

レヴィ

サツマイモ揚げですか？ それなら持ってきました。こちらです。

フリックル

えっ？ いや、頼んでいないと言っているんだが？

レヴィ

大丈夫ですから、まずは受け取ってください。揚げたてを持ってきたので、温かくてサクサクなんです。

フリックル

ふむ……温かいサツマイモ揚げか。これを私にただでくれると？

フリックル

ちょうど食べたいと思っていたところだ。ありがたく受け取ろう。

フリックル

レヴィ、お前から何かをご馳走になる日が来るとはな。

レヴィ

あ、ただ差し上げるわけではなくて……フリックル様にお願いがあるんです。

フリックル

ほう？ つまり、これは賄賂というわけか？

フリックル

まあ……ひとまず聞いてやろう。

レヴィ

ありがとうございます、フリックル様。

フリックル

だがな、お前。相手を見て策を使うべきだったな。

レヴィ

え、ええっ！？

フリックル

私がサツマイモ揚げ一袋を賄賂に受け取ったくらいで、お前の思い通りに動くようなカモの魔女に見えたのか？

レヴィ

フ、フリックル様！ 何か誤解されていると思うんですけど！

レヴィ

私はただ、論文について助言をいただこうと……！

フリックル

論文？ そういうことだったのか？

フリックル

私に魔女昇級論文の最終権限があることを狙った、というわけだな？

レヴィ

違います！ そこまで考えていたわけじゃありません、フリックル様！！

レヴィ

私はただ……どうすれば新しい論文を書けるのか、フリックル様に助言をいただきに来ただけなんです！

フリックル

単に助言を求めに来た、と？

レヴィ

は、はい！ 論文に関しては、フリックル様ほどの専門家はいらっしゃいませんから！

フリックル

ふむ……そういうことだったのか。

フリックル

最近仕事が多くて、少し神経質になっていたようだな。

フリックル

ひとまず、これを食べて少し気を落ち着けるとしよう。

フリックル

もぐもぐ……。

レヴィ(心の声)

サツマイモ揚げを食べながら……怒りを鎮めていらっしゃる？

レヴィ(心の声)

やっぱり持ってきてよかっ……！ いや、これのせいで誤解されたんだから、そうでもないのかな。

フリックル

それで、どんな助言を求めに来たんだ。

レヴィ

はい！ 論文の役に立つことなら、どんな助言でもいただきたいんです。

レヴィ

論文のアイデアを出すときに、どういうふうに考えればいいのかとか……。

レヴィ

研究に向き合う心構えや、テーマ選びのコツ……論文を書かれたときの経験談なんかでも構いません。

レヴィ

ご存じの通り、私は長いあいだ見習い魔女のままなので、何か新しいものが必要だと思いまして。

フリックル

ふん、新しい何かが必要だと？

フリックル

楽な道ばかり探す魔女らしい発想だな。

レヴィ

楽な道ばかり……ですか？

フリックル

そうだ。新しい発想というものが、空から突然降ってくるとでも思っているのか？

フリックル

レヴィ、お前は今日一日、何をして過ごしていた？

レヴィ

それは……アルバイトです。ニンジンを揚げて、サツマイモを揚げて、配達して、それから……。

フリックル

論文に費やした時間は、少しでもあったのか？

レヴィ

そ、それは……仕方ないことじゃないですか！ 私にも生活がありますし！

レヴィ

論文は、退勤してから書こうと思っていたんです！

フリックル

ああ、そうだろうな。今は食べていかなければならないから後で。退勤してから書けばいいから後で。

フリックル

事情が苦しいのは分かる。だが、そういう生き方をしているから、お前はまともな論文を書けないのだとは思わないのか？

フリックル

レヴィ、お前はこれまで数えきれないほど論文を提出してきたが、その大半は上級魔女の段階で差し戻され、私のところまでほとんど来ない。

フリックル

そして、たまに上がってくる論文もだ。読んでみれば、目も当てられない出来のものばかりだ。

フリックル

最高の集中力を保ち、一日中論文のことだけを考え、研究と執筆に打ち込んでいる魔女たちでさえ……。

フリックル

学術誌に載せられる論文を書き上げるのは、妖精に青汁を飲ませるくらい難しいんだぞ！

フリックル

それなのに、一日中アルバイトばかりして、寝ぼけた頭で明け方に少しずつ書いた論文を通すつもりなのか？

フリックル

正式な魔女を甘く見るにも限度がある！

レヴィ

で、でも……。

フリックル

私に助言を求めたいなら、まずはその心構えから叩き直すべきだな。

フリックル

「アルバイトは全部やめました。弟子にしてください」と、膝をついて頼む気にはならなかったのか？

フリックル

その程度の必死さもないくせに、新しいアイデアで論文を楽に通そうとは、呆れたものだ。

レヴィ

ううう……！

フリックル

何だ？ 何か言いたいことでもあるのか？

レヴィ

……

フリックル

ないなら帰って、足でも洗って寝ろ。

フリックル

通りもしない論文にしがみつくのは、どうせ時間の無駄だからな。

フリックル

明日もアルバイトがあるんだろう？ 違うか？

レヴィはその場を後にした。

レヴィ

ううっ、本当にひどい。

レヴィ

フリックル様が優しく方法を教えてくれるとは思ってなかったけど……。

レヴィ

あそこまで言う必要はなかったんじゃないの？

レヴィ

私がアルバイトに追われて、論文や研究に使う時間を取れないのは事実だけど……。

レヴィ

適当に論文を書いているわけじゃ、絶対にないし……。

レヴィ

アルバイトばかりしている魔女だからって、見下されていい理由にはならない！！

レヴィ

私だって……私だって、魔女社会で認められたい。

レヴィ

ただの荷物持ち、雑用係、行商人、配達員、薬草運び、揚げ物の魔女……もう、そんな扱いには耐えられない！

レヴィ

だから……論文を書かなきゃ。

レヴィ

フリックル様が、サツマイモ揚げからスターキャンディが出てきたみたいに、ひっくり返るほど驚くような論文を。

レヴィ

毎日アルバイトと生活に追われる見習い魔女でも……。

レヴィ

立派な論文を書けるんだって、絶対に見せてやる！

CHAPTER 4

終わりなき思考の流れ

そうしてレヴィは、きちんとした論文を書くため、新しい装いに着替えて気合いを入れ直した。

レヴィ

ううっ、苔があんまり育ってない。ポーシャー店長のノルマ、達成できるかな？

レヴィ(心の声)

……じゃない。論文のことだけ考えよう。フリックル様が言っていた通り、すべての時間を論文に注ぎ込むんだ！

レヴィ(心の声)

魔力苔なら、目を閉じてても見つけられるし。論文のことを考えながらでも、バイトはできるはず。

レヴィ

あっ、見つけた。魔力苔。

レヴィ(心の声)

魔力苔……そういえば、これもいい研究材料だよね。

レヴィ(心の声)

もう関連論文は数えきれないほどあるけど。

レヴィ(心の声)

私も魔力苔についての研究論文はたくさん書いたことがあるし……。

レヴィ(心の声)

ポーションの製造法に関する論文は、全部ポーシャー店長の論文と内容がかぶってたし……。

レヴィ(心の声)

別の活用法についての論文も、数えきれないほどあった。

レヴィ(心の声)

特にアーサナ様の論文は……ううっ、思い出しただけで、もう苔をひとつかみ噛んだみたいな気分になる。

レヴィ(心の声)

たしか、『咀嚼運動による魔力苔の治療効能の強化法』って論文だったよね。

レヴィ(心の声)

苔の魔力と反応する性質の魔力を、魔女の唾液に含ませて……。

レヴィ(心の声)

特別な方法で苔を砕くと、健康にいい成分が生成される、って内容だった。

レヴィ(心の声)

こういう発想こそ、私が探し回っていた新しい論文なのかな？

レヴィ(心の声)

この洞窟には魔力苔だけじゃなくて、魔力鉱石もあるし……。

レヴィ(心の声)

咀嚼運動による鉱石の魔力強化で、新素材を研究するのはどうだろう？

レヴィ(心の声)

うーん……鉱石を噛めないと研究できないけど……。

レヴィ(心の声)

竜族ならできるよね？ 鉱石にも詳しそうだし。

レヴィ(心の声)

知り合いの竜族って、オパールくらいしかいないけど……一度お願いしてみようかな？

マカシャ

何をそんなに考え込んでるんだい？

レヴィ

うわっ、びっくりした！ マ、マカシャ様？

レヴィ

マカシャ様がこんなところに、どうして？

マカシャ

魔力苔を採りに来たんだよ。

マカシャ

私は材料を自分で探しに行くほうだからね。

マカシャ

この目で確かめて、自分で鑑定した上質な材料だけを使うんだよ〜。

レヴィ

そうなんですね。私も苔採集のアルバイト中なんです。

マカシャ

ほお〜、ずいぶんたくさん採ったじゃないか。

マカシャ

それよりレヴィ、論文のほうはうまくいってるのかい？

レヴィ

論文ですか？

マカシャ

そう。前に私に聞きに来ただろう？ あれから進展があったのかと思ってね。

レヴィ

うう、論文……実は全然進んでいません。

レヴィ

マカシャ様のところに伺ったあと、フリックル様にも会いに行ったんですけど……。

レヴィ

今みたいにバイトばかりしていては、まともな論文なんて書けないって、叱られただけでした。

マカシャ

フリックルは、ちょっと厳しいからね。

マカシャ

でも、あれでもあの子なりに助けてくれたんだと思うよ？

レヴィ

マカシャ様がそうおっしゃっても……。

マカシャ

論文についての助言なら、どんなものでも聞くって言ってなかったかい？

マカシャ

経験談みたいなものでもいい、ってね。

レヴィ

はい、それはそうです。少しでも役に立ちそうなことなら、何でも。

マカシャ

フリックルが君にああ言ったのは、きっと全部、自分が経験してきたことだからだよ。

マカシャ

眠ることも、食べることも、休むことも削って……ただ研究だけに打ち込んで、最高の地位に上りつめた魔女。

マカシャ

それが、フリックルという魔女なんだ。

レヴィ

それはもちろん、私も知っていますけど……。

レヴィ

あの頃と今では状況が違うんです！ 私は一人だけ下っ端で、どれだけたくさん仕事をしなきゃいけないと思ってるんですか！

レヴィ

それも知らないで、結局もっと努力しろなんて、古臭い説教みたいなことを言ってるだけじゃないですか？

マカシャ

その顔だと、今ごろたぶん心の中で……。

マカシャ

「この古臭い魔女が〜、また努力が足りないって言ってるよ〜」とか思ってるんじゃないかい？

レヴィ

え？ ち、違います！ 絶対そんなこと思ってません！

レヴィ(心の声)

えっ？ どうして分かったの？ マカシャ様って、心でも読めるの？

マカシャ

私たち宮廷魔女に、時代が違うなんて言いたいなら、勘違いしないほうがいい。

マカシャ

昔の魔女王国がどんな環境だったのか、私たち魔女が互いに何をしてきたのか……。

マカシャ

君みたいな駆け出しの魔女には、想像もできないはずだからね。

マカシャ

今のレヴィが少し苦労しているからって、私たちより大変な時間を過ごしていると思われちゃ困るよ。

レヴィ

ひ、ひいっ……！ わ、分かりました！

マカシャ

うん。分かったならいいんだ。

レヴィ

じゃあ、やっぱりフリックル様の言葉が正しかったんだ。

レヴィ

今までバイトに使ってきたたくさんの時間は、結局ただの時間の無駄……。

レヴィ

正式な魔女になるためには、全部やめて研究に専念するしかないのかな？

マカシャ

うーん、そう聞かれると、必ずしもそうとは思わないけどね？

レヴィ

え、ええっ！？

マカシャ

長い年月、いろいろなバイトをしながら経験を積んできた。

マカシャ

それは、他のどんな魔女もやってこなかったこと。つまり、君だけの領域だ。

レヴィ

私だけの領域……バリエも、そんなことを言っていました。

レヴィ

正式な魔女になるには、まったく新しい方法で、自分だけの領域を切り開かなきゃいけないって。

マカシャ

あいつも、なかなか使えることを言うじゃないか。バリエ自身が、一番いい例だからね。

マカシャ

あの本の魔女は、本や論文の名前を言えば、誰が書いたのか、どんな内容なのか、写本がいくつあって、それぞれどこに保管されているのかまで、ほとんど答えられる。

マカシャ

宮廷書記官のシェラムでも、そこまではできない。完全にバリエだけの領域というわけさ。だから正式な魔女なんだよ。

レヴィ

それはそうですけど、バイトなんて……正式な魔女になる役には立たないじゃないですか。

マカシャ

本を探す才能だって、それ自体が何かの役に立つとは限らないだろう？

マカシャ

今、君がやっている苔を探す仕事と、そこまで違うかな？ 私にはそうは思えないけどね。

マカシャ

大事なのは、それに価値があると主張することだ。論文は説明じゃなく、主張だからね。

レヴィ

私のしていることに、価値があると主張する……。

レヴィ

そう、そうです！ 私がやりたかったのは、それだったんです！

レヴィ

私がアルバイトばかりしているって見下してくるフリックル様に、目にもの見せてやりたいんです！

マカシャ

そう、それだよ！ 権威ある相手に一泡吹かせて、認めさせたい！ それでこそ魔女だ！ い〜ひひ！

レヴィ

本当にありがとうございます、マカシャ様。何か分かった気がします！

レヴィ

それでは、私はこれで戻ります。少しでも時間を節約して、論文に使いたいので。

マカシャ

うん、帰るといい。

マカシャ(心の声)

ふむ〜、行ったかな？ 行ったね？

マカシャ

ふう、レヴィが戻ってくれて助かったよ。

マカシャ

あの子、少し放っておくだけで、魔法植物を根こそぎ採っていくって有名だからね。

マカシャ

いったいどうやって、あんなに早く採集を終わらせてるんだい？

ポーシャーの店

レヴィ

戻りました、店長！

ポーシャー

あれ？ もう戻ってきたの？ 魔力苔は採り終わった？

レヴィ

あっ、それが……ノルマを達成したわけではないんですけど。ひとまず、これだけです。

ポーシャー

どれどれ～。ふむ、ほとんど揃ってるわね。足りないってほどじゃないけど……。

ポーシャー

ノルマに届かなかった分は、日当から引いておくわね？

レヴィ

ええっ！？ そ、そんなぁ……。

ポーシャー

それよりレヴィ、採集に出てからそんなに経ってないのに、ずいぶん集めてきたわね？

ポーシャー

この速さでできるなら、次から採集時間を短くしてもよさそうね？

レヴィ

だ、だめです！ それだけはどうか……！

レヴィ(心の声)

こうなるのが分かってたから、今までは採集が終わったあと、洞窟で論文を書いたりしてたのに……！

レヴィ(心の声)

今回は図書館に行こうと思って早く戻ったら、逆に仕事が増えちゃったじゃない！

レヴィ(心の声)

私以外、誰もこの速さで採れないから、今まで疑われずに済んでたのに。ううっ……！

マカシャ(回想)

ほんの少しでも自分だけの領域を持っていて、初めて正式な魔女として認められるんだ。

マカシャ(回想)

大事なのは、それに価値があると主張することだ。論文は説明じゃなく、主張だからね。

レヴィ

待って。私以外、誰にもできない？

レヴィ

時間を節約するために開発した薬草探知魔法……私以外、誰も知らないってこと？

ポーシャー

そんなにショックを受けた顔をしても、仕事は減らないわよ？

ポーシャー

ほら、採ってきた苔の処理、先に済ませちゃって。

ポーシャー

まったく、レヴィは隙があるとすぐ休もうとするんだから。

レヴィ

は……はい、店長！

レヴィ(心の声)

まったく新しい論文のテーマ……ついに見つけたのかな？

CHAPTER 5

終わりなき挫折の連続

バリエ

レヴィのやつ……急に入ってきたと思ったら、ものすごい勢いで論文を書いてるじゃないか。

バリエ

自分だけの新しい論文のヒントでも掴んだのかな？

レヴィ

バリエ……バリエ？

バリエ

呼んだ？ 何か必要なものでもある？

レヴィ

あの……あれ、なかったっけ？ その、何の論文だったかな。

レヴィ

石みたいなものを、魔力の波長単位ごとに整理した……あの……。

バリエ

『有機物から放出される魔力の測定法と、周波数帯域別表記の確立に関する提案』のこと？

バリエ

フリックル様が書いた論文だけど。

レヴィ

そう、それ！ それを持ってきてもらえないかな？

バリエ

分かった。ええと……。

バリエ

はい、これ。

レヴィ

ありがとう、バリエ。

レヴィ

つまり、この論文にたしか……あった！ これをこう代入すれば……。

バリエ

うわ……あれ、本当にレヴィ？ 次のバイトの時間になってるはずなのに、びくともしないんだけど？

バリエ

あのままだと店長に怒られるんじゃないかな。

シェラム

バリエ。図書館の仕事は順調ですか？

バリエ

あっ、いらっしゃったんですね。シェラム書記官。

シェラム

ん？ あそこで、ものすごい勢いで何かを書いている魔女は……レヴィですか？

バリエ

はい、そうです。論文を書いているんですよ。

バリエ

レヴィとは長い付き合いですけど、あんな姿を見るのは初めてですねぇ。

シェラム

あー、そうですか。論文を書いている、と。

レヴィ

よし、よし。何か形になってきた気がする！

レヴィ

これならフリックル様も、きっとひっくり返るほど驚くはず！

レヴィ

サツマイモ揚げの中に入っていたスターキャンディ……いや、赤キャンディ級の衝撃を与えてやるんだから！

シェラム

サツマイモ揚げの中に……赤キャンディ？ バリエ、あれはいったい何の話ですか？

バリエ

レヴィがフリックル様に論文の助言を求めに行って、かなりきつく叱られたみたいなんです。

バリエ

アルバイトばかりしている魔女に論文は書けない、というようなことを言われたらしくて……。

バリエ

フリックル様に、論文で見返してやろうとしているみたいですね。

シェラム

あー、そういうことですか。なかなか大胆なことを考えますね。

シェラム

フリックルに挑むというなら、相当すごい論文ができているのでしょう。

シェラム

どれどれ……。

シェラム

う、うえええっ？ これはいったい何ですか？

レヴィ

うわっ、びっくりした！ シェ、シェラム書記官？

シェラム

レヴィ！ 今これ、正式な魔女の審査に出す論文を書いているんですよね？

レヴィ

はい、そうですけど……。

シェラム

これを見れば、たしかにフリックルはひっくり返るほど驚くでしょうね。

シェラム

何ですかこれは？ 行揃えも筆跡もめちゃくちゃじゃないですか！ 字間も均一ではありませんし……。

シェラム

論文はもちろん内容で審査されますが、それは最低限の体裁が整っている場合の話です！

シェラム

レヴィの論文審査が一次でほとんど差し戻されていることは知っていましたが……。

シェラム

はあ……まさか、こんな理由だったとは思いませんでした！

レヴィ

そ、そんなにひどいんですか……？ バリエに確認してもらったときは、何も言われなかったところなのに……。

シェラム

何ですって？ それは本当ですか、バリエ？

バリエ

わ、私が見たのは、当然下書きだと思っていたからですよ！

バリエ

内容だけ確認すれば、審査に出すときには当然きれいに書き直すと思っていたんです！

シェラム

まあ、私でもそう思いますね。

シェラム

こんな論文を今まで提出していたなんて……いくら見習い魔女でも、これはひどいですよ。

レヴィ

で、でも……論文をどう書けばいいかなんて、誰も教えてくれなかったんです！

レヴィ

他の論文を参考にして形式は合わせているつもりですけど、ちゃんと書くのが本当に大変で。ううっ。

シェラム

それは当然でしょうね。私も最初は、形式を整えるだけで相当苦労しましたから。

レヴィ

苦労、ですか？ シェラム様は書記官なのに、形式を整えるのに苦労されたんですか？

シェラム

私だって、生まれたときから書記官だったわけではありません。書記官になるために、どれほど努力したと思っているんですか。

シェラム

三食、自分で揚げたニンジンだけを食べながら……勉強して、本を書いて、筆跡を矯正して……。

シェラム

思い出すだけで、指の関節が痛くなってきます。いったい何年あんな生活をしていたのか、もう覚えていないくらいです。

レヴィ

それって……本当なんですか？

レヴィ

書記官は、もともと字が上手だから書記官になったんだと思っていました……。

レヴィ

そんな時代があったなんて、初めて聞いた。

シェラム

私がレヴィに嘘をついて、何になるんですか？

シェラム

とにかくレヴィ。論文作業を続けてください。

シェラム

ふむ……フリックルに一泡吹かせようという心意気は買います。ここにいる間は、私が論文の形式を見てあげましょう。

シェラム

あれだけ見下していた見習い魔女が、非の打ち所のない論文を突きつけたら、フリックルはどんな顔をするでしょうね。
面白そうです。

シェラム

そして私が退勤したあとは、バリエが形式を見てくれます。

バリエ

えっ？ では、私の退勤は？

シェラム

バリエはレヴィを手伝うんです。今まで形式の確認をしてこなかった責任がありますからね。

バリエ

くっ、突然の残業……しかもレヴィの論文が終わるまでだなんて！

バリエ

レヴィ、お前ぇ……！

レヴィ

うっ、ごめん、バリエ。できるだけ早く終わらせるから……。

バリエ

やめて。

レヴィ

う、うん？

バリエ

謝らなくていいって言ってるの。

バリエ

レヴィ。今回の論文、確かなものなんだよね？

レヴィ

確か……かって？

バリエ

フリックル様が見て、ひっくり返るような論文なんでしょ！

バリエ

サツマイモ揚げに入っていた赤キャンディみたいに、衝撃的な論文なのかって聞いてるの！

レヴィ

そ、そのくらいかどうかは、正直分からないけど……。

レヴィ

最善は尽くすよ。正式な魔女になって、必ず認めてもらうんだから。

バリエ

それでいい。謝る必要も、私のために急いで論文を終わらせる必要もない。

バリエ

形式は私が抜かりなく整えてあげるからぁ……何日かかってもいい。最高の論文を書きなよ。分かった？

レヴィ

……バリエ。

レヴィ

分かった。ありがとう、バリエ。

数日後――

ポーシャー

レヴィ。今日の仕事は全部片づけた？

レヴィ

はい、店長。

レヴィ

材料採集は朝のうちに終わらせましたし……材料の下処理も済ませて、乾かすものも出してあります。

レヴィ

棚の整理と掃除も、全部終わっています。

レヴィ(心の声)

ううう……バリエのやつ、本当に論文が終わるまで付き合ってくれた。

レヴィ(心の声)

何日徹夜したんだろう？ その間に溜まった仕事が多すぎる。このまま過労で週末農場行きなのかな……？

レヴィ(心の声)

でも今回の論文、手応えはある。新しい理論に、完璧な形式。

レヴィ(心の声)

今度こそ、本当に……正式な魔女になれるんじゃないかな？

ポーシャー

ふうん、そう？ お店の仕事は全部終わったのね？

ポーシャー

それじゃあ、外に出てチラシを貼ってきて。

レヴィ

うっ、チラシがまだ残っていたなんて。分かりました、店長。

レヴィ

それでは、行ってきま――

シュウッ！

レヴィ

あれ？ これは……魔法郵便？

レヴィ

ま、まさか！ この手紙は！？

ポーシャー

あなた宛て？ その印章、魔女学会のものじゃない？

レヴィ

はい、そうです。今回の論文の結果が出たみたいです！

ポーシャー

今回の論文、昨晩出したって言ってなかった？ 結果が出るの、早いわね？

レヴィ

もしかしたら、完璧な論文だったから、審査がすぐ終わったんじゃないでしょうか？

ポーシャー

それじゃなくて、普通、ここまで早い場合は……。

ポーシャー

はあ、いいわ。とにかく早く開けてみなさい。

レヴィ

もちろんです！ ええと、結果は……。

レヴィ

『正式魔女論文 審査結果報告書』

レヴィ

『一次審査結果……』

レヴィ

『差し戻し、不合格』

レヴィ

えっ？ ふ、不合格……？

レヴィ

ど、どうして……。

CHAPTER 6

終わりなき反復の輪

レヴィ

今回も……不合格……？

レヴィ

ど、どうして……。

レヴィ

もしかしてとは思ったけど、やっぱりダメだったの？ 今回は違うと思ったのに……。

レヴィ

私なんか、どれだけ頑張っても、正式な魔女にはなれないの？

レヴィ

今回は本当に頑張ったのに！ バリエだって一生懸命手伝ってくれたのに！

レヴィ

ううっ、うううっ……！

レヴィ

うわあああん！

ポーシャー

はあ……いつもの不合格なのに、ずいぶん悲しそうに泣くのね？

ポーシャー

うるさいから、泣くなら外で泣いてきなさい。

レヴィ

ぐすっ、ううっ……！

レヴィ

……

レヴィ

はぁい……。

ポーシャー

あ、出ていく前にちょっと待って。

レヴィ

はい？

ポーシャー

チラシ、持っていくのを忘れないでね。

レヴィ

……はい。

キィ……ガチャ。

ポーシャー

ふむ〜。レヴィのやつ、いつもより落ち込んでいたわね……。

ポーシャー

いったいどれだけ大した論文を書いたつもりで、あそこまで落ち込んでいるのかしら？

ポーシャー

レヴィ、何て言ってたっけ？ うちの店のバイトで使っていた、自分だけの技術を魔法としてまとめた論文だったかしら？

ポーシャー

どれどれ、コメントみたいなものはないの？ 通知書は……えっ？

ポーシャー

これ……何？

場面転換：王国

フリックル

今回の報告は以上です。女王陛下。

ベリータ

うむ、ご苦労だった。

ベリータ

ところでフリックル。今回、一次で差し戻された論文の中に、レヴィの論文があったな。

ベリータ

確認はしたか？

フリックル

いいえ。一次で差し戻された論文までは、一つひとつ確認しておりません。

フリックル

一次審査を担当する上級魔女たちが、不適切だと判断したのでしょう。

ベリータ

それはそうなのだが、あの論文はそこまで悪いものではないように思えてな。

ベリータ

一次で差し戻された理由も、ある程度は見当がつく。だが、実際に開いてみると、内容はかなりよい。

ベリータ

あれは確かに、新しい魔法の一種と呼べるものだった。

フリックル

一次で差し戻された論文を……女王陛下が自ら確認なさったのですか？

ベリータ

うむ。先日、図書館に立ち寄ったのだが、バリエがなかなか出てこなくてな。不思議に思っていたら……。

ベリータ

レヴィの論文を手伝っていたのだ。そのときのレヴィの様子がただ事ではなかったので、覚えていた。

フリックル

そうでしたか。ですが……。

フリックル

女王陛下がよい論文だとお認めになったからといって、特例を認めるわけにはいきません。

ベリータ

それはお前の言う通りだ。だが、惜しい論文であることも事実だ。

ベリータ

再提出してくれればよいのだが……。

フリックル

再提出ですか？ 論文の再提出もまた、一次で即座に差し戻される理由になるはずですが。

ベリータ

分かっている。ただ、一次で差し戻された理由が、私の考えている通りなら問題ないはずだ。

ベリータ

レヴィが諦めないことを……願うしかないな。

場面転換：チラシ貼りのあと

レヴィ

チラシ……貼り終わったけど……。

レヴィ(心の声)

こんなことを続けて、本当に意味があるのかな？

レヴィ(心の声)

どれだけ一生懸命働いて、勉強しても、バイトばかりしているからって、みんな私を見下して……。

レヴィ(心の声)

今回こそ間違いないと思った論文も、何度も差し戻されて……。

レヴィ(心の声)

私は魔法が上手いわけでもないし、強いわけでもないし、文章だってうまく書けない。

レヴィ(心の声)

得意なことなんて……揚げ物と配達くらいしかない、ぱっとしない魔女。

レヴィ(心の声)

もしかすると最初から、正式な魔女なんて、私には無理だったのかな？

レヴィ(心の声)

どれだけ努力しても、結局、私は……。

キィ……ガチャ。

レヴィ

戻りましたぁ……。

ポーシャー

おかえり。チラシは全部貼ってきた？

レヴィ

はい、店長。私、もう……退勤してもいいですか？

ポーシャー

ちょっと待って。

レヴィ

はい？ まだ仕事が残ってるんですか？ 次のバイトにも行かないと……！

ポーシャー

そうじゃなくて、レヴィ。あなたが今回書いた論文のことよ。

レヴィ

はい？ 論文ですか？

ポーシャー

そう、論文。

ポーシャー

この論文、タイトルがどう見てもおかしいんだけど。間違えて書いたんじゃないの？

レヴィ

私の論文のタイトルに……何か問題がありましたか？

ポーシャー

問題がないと思う？『採集アルバイトの時間短縮のための魔法的考察』が論文タイトルなのよ？

ポーシャー

まあ、他の魔女が提出した論文なら、少なくとも内容くらいは見てもらえたでしょうけど……。

ポーシャー

著者がレヴィになっていたら、一次落ち、それも門前払いになるのは当然でしょうね。

ポーシャー

どうにも信用できないアルバイト魔女が書いた、アルバイトに関する論文……審査員たちがどう思うか、分かるでしょう？

ポーシャー

どうせアルバイトの小技みたいなもので、学術的な価値はない。そう思われたに決まっているわ。

レヴィ

そ、そういうことだったんですか？

レヴィ

じゃあ……タイトルさえちゃんと付ければ、論文は通るんでしょうか？

ポーシャー

そんなの、私に分かるわけないでしょう？

ポーシャー

その論文の中身を見たわけじゃないのに、どうやって判断するの？

レヴィ

新しい論文のタイトル……学術的な価値があるように見える形で書けばいいんですよね？

ポーシャー

そうね。見た目からして変なものじゃなければ、少しはましになるんじゃない？

レヴィ

ありがとうございます、店長。もう一度提出してきます。論文を。

ポーシャー

ふうん、そう？ まあ好きにしなさい。論文を出しに行くなり、次のバイトに行くなりね。

キィ……ガチャ。

しばらくして――

コンコン。

レヴィ

お客様かな？ はい、今出ます！

キィ……。

フリックル

ここにいたか、レヴィ。

レヴィ

フ、フリックル様？

フリックル

何だ、レヴィ。今のが客を迎えるときの挨拶か？

レヴィ

あ、いえ！ いらっしゃいませ、フリックル様。

レヴィ

お探しのポーションでもありますか？

フリックル

疲労回復剤を一つくれ。

レヴィ

はい！ 少々お待ちください。

レヴィ

こちらです。

フリックル

ふむ、よし。それと、これを受け取れ。

レヴィ

はい？ こ、これは……。

フリックル

レヴィ、お前の今回の論文審査報告書だ。

レヴィ

え、ええっ？

レヴィ(心の声)

フリックル様が……これを直接届けに来たってこと？

レヴィ(心の声)

じゃあ少なくとも、フリックル様の審査までは進んだってことだよね？ ということは、まさか……！

レヴィ

ついに……通過したんですか！？

フリックル

何？ 通過したのか、だと？

フリックル

ずいぶん自信たっぷりに聞くじゃないか。そんなに今回の論文に自信があるのか？

レヴィ

そ、それは……！

レヴィ(心の声)

自信があるかって？ ううっ、フリックル様のこの態度……やっぱり今回も不合格？

レヴィ(心の声)

絶対に通るって信じていたのに、いざフリックル様を前にすると、急に自信が……。

フリックル

答えられないのか。やはり自信がないようだな？

レヴィ

ううっ……！

レヴィ(心の声)

言葉が出ない！ 自信がありますって、言わなきゃいけないのに……！

フリックル

当然だろうな。魔女というものが、一朝一夕で変わるはずもない。

レヴィ

ち、違います！

レヴィ

自信はあります！ 今回の論文は、必ず通っているはずです！

レヴィ

誰も考えなかった新しい分野！ 完璧な形式！ そして学術的価値まで……。

レヴィ

自分で言うのも何ですが、欠点の見当たらない、私の最高の論文でした。

レヴィ

あの論文を作るために、どれだけ努力したと思っているんですか。通らないほうがおかしいです！

レヴィ

今回の論文を書いたときだけじゃありません。バイトをしているときも、眠気と戦いながら論文を書いているときも……。

レヴィ

少し……いえ、もしかするといつも……楽にできる方法はないかって考えていたのは事実ですけど！

レヴィ

正式な魔女になって、魔女社会に認められたいという気持ちだけは、いい加減だったことなんてありません！

レヴィ

きっとその封筒の中には……論文通過と書かれているはずです！

フリックル

……

フリックル

そうか。

フリックル

だが、どうする？

フリックル

その封筒に入っている結果は……通過ではないぞ？

CHAPTER 7

終わりなき線路の終点

レヴィ

え……通過じゃないんですか？ それって……。

へなへなっ。

レヴィ

そういうことだったんですね。私は結局、正式な魔女にはなれないんですね。

レヴィ

今回は何か違う気がして、アルバイトも休んで論文に集中したのに……。

レヴィ

フリックル様がこうして直接来てくださったから、いい知らせだと思ったのに……。

フリックル

何だ？ 泣いているのか？ しかも何だ、「正式な魔女になれない」だと？

フリックル

まったく……今回が最後の機会でもないのに、情けないことを言うな。ちっ。

レヴィ

ううっ……好きに言ってください。

レヴィ

どれだけ努力しても、結局、私みたいな見習い魔女は永遠に見習い魔女なんですよね。

レヴィ

フリックル様のおっしゃった通りだったんです。今までやってきたこと、全部、時間の無駄だったなんて……！

フリックル

そういうことは、結果を確認してから言ったらどうだ？

フリックル

まだ封筒を開けてもいないだろう。

レヴィ

封筒……ですか？

レヴィ

審査結果は、もうおっしゃったじゃないですか。フリックル様が、通過ではないって……。

フリックル

論文審査の結果は、通過と差し戻しだけではない。

レヴィ

え？ それじゃあ……。

フリックル

気になるなら、自分で開けて確認しろ。

レヴィ

わ、分かりました。

レヴィ

『正式魔女論文 審査結果報告書』

レヴィ

『対象：魔力運用による一定範囲内の魔法有機物の探知と分類法　レヴィ著』

レヴィ

『審査結果：修正後掲載』

レヴィ

こ、これは！

フリックル

修正後掲載。いわゆる「マイナーリビジョン」という結果だ。

フリックル

結論から言えば、お前の今回の論文は……学術誌への掲載がほぼ確定した、という意味だな。

レヴィ

それって……通過も同然ってことですよね？

フリックル

だが！

フリックル

最終的に通過するには、理論的説明の補強と、それに伴う修正が必要だ。

レヴィ

修正して提出すれば、学術誌に掲載……論文通過！

レヴィ

ついに私も、正式な魔女になれるんですか！？

フリックル

完全に確定したわけではない。そこまで喜ぶには早いぞ。

フリックル

修正がひどければ、差し戻しに変わる可能性もある結果だ。

レヴィ

……

フリックル

レヴィ、お前の論文は、なかなか面白い内容だった。

フリックル

材料採集の新たなパラダイムと言ってもいい。

フリックル

この魔法が論文として共有されれば、材料採集があまりに楽になって、採集アルバイトというもの自体が消えるかもしれないほどだ。

フリックル

だが、お前が提出した論文は、新しい魔法がどう成立するのかを、どうにか説明している程度にすぎない。

フリックル

論文にふさわしい理論的な土台がない。

フリックル

それが、最終審査員としての私のコメントだ。

フリックル

これを補うことが……果たしてお前にできるかな？

レヴィ

できます。

フリックル

ずいぶん自信がついたじゃないか。心構えは悪くない。

フリックル

ちなみに、修正後に差し戻された場合、同じ内容の論文は二度と受け付けない。そう思っておけ。

フリックル

それから、修正版の提出期限は……一週間だ。

レヴィ

え？ 一週間……ですか？

フリックル

この論文は、たった数日で完成させたとシェラムから聞いている。

フリックル

論文を一から書いた時間よりも長い修正期間を与えているんだ。簡単だろう？

レヴィ

そ、そんな……簡単なわけないじゃないですか！

レヴィ

私が長い年月かけて身につけてきたアルバイト技術を説明するのと、それを魔法理論として確立するのは全然違うんです！

レヴィ

論文の修正期限が、たった一週間だなんて！

フリックル

では、せいぜい頑張れ。私は行く。

レヴィ

ど、どうしよう……。

レヴィ(心の声)

たった一週間で、修正した論文を提出するには……。

ポーシャーの店

ポーシャー

レヴィ、お店はちゃんと見てた？

レヴィ

はい、店長。

ポーシャー

シストから納品してもらった材料を持ってきたから、下処理をお願いね。

レヴィ

……

ポーシャー

レヴィ？

レヴィ(心の声)

一週間。論文の修正に一週間……その間に修正を終わらせるには……。

ポーシャー

何をそんなに考え込んでいるの？ 私の話、聞こえてる？

レヴィ

ポーシャー店長。

ポーシャー

ん？

レヴィ

私……アルバイト、辞めます。

ポーシャー

何ですって？ 辞めるの？

レヴィ

はい。他のアルバイトも、全部辞めるつもりです。

レヴィ

今回の論文……どうしても通さなきゃいけないんです。

レヴィ

こんな機会、きっとそう何度もないと思うので。

ポーシャー

はあ〜、そう。分かったわ。じゃあ、もう行っていいわよ。

レヴィ

え？ 行っていいんですか？ 引き止めたりは……しないんですか？

ポーシャー

どうして私が？ 期待してたの？

レヴィ

あ、いえ。

レヴィ

それでは……お世話になりました、ポーシャー店長。

レヴィ(心の声)

本当に辞めちゃった、アルバイト。

レヴィ(心の声)

こうなった以上、絶対に論文を通してみせる。

ポーシャー

ねえ、レヴィ。

レヴィ

あっ、ポーシャー店長？

ポーシャー

論文を通すために、アルバイトを辞めるって言ったわよね？

レヴィ

はい。修正後掲載は前向きな結果だって聞きましたけど……。

レヴィ

今みたいにアルバイトをしながらだと、通すのは難しそうなので。

ポーシャー

そうやってアルバイトを辞めて論文だけを書いたからって、必ず通る保証はないでしょう？

レヴィ

それは……そうですね。

ポーシャー

もし、論文が落ちたら？

レヴィ

え？

ポーシャー

落ちたら、そのときはどうするの？

レヴィ

論文が、落ちたら……？

レヴィ(心の声)

そんなこと……考えたくもない。

レヴィ(心の声)

でも……店長の言う通り、通る保証がないのも事実だ。

レヴィ(心の声)

もし今回の論文も落ちたら……そのときは……。

レヴィ

そのときは……新しい論文を書くしかないですよね。

レヴィ

今まで、ずっとそうしてきましたから。

ポーシャー

そう。

ポーシャー

もし落ちたら戻ってくるのかと思って聞いただけよ。

ポーシャー

あなたほど費用対効果のいいアルバイト、どこにもいないもの。

ポーシャー

もう言うことはないから、行っていいわ。

レヴィ

はい、店長。

レヴィ

……ポーシャー店長。

ポーシャー

何？ まだ何かあるの？

レヴィ

今まで、本当に……本当に……ありがとうございました！

ポーシャー

ありがとう？ 私、そんなに何かしてあげたかしら？

ポーシャー

最低賃金も払わずにこき使った覚えくらいしかないんだけど。

レヴィ

もちろん、それはそうなんですけど……。

レヴィ

ポーションや植物の扱い方も学べましたし。

レヴィ

今回の論文のテーマ……その基礎を教えてくださったのも、ポーシャー店長でした。

レヴィ

論文が一次で落ちたときも……私が諦めないように、助けてくれましたから。

ポーシャー

はあ〜、そう。まあ、そう思いたいなら好きにしなさい。

ポーシャー

論文で忙しいんじゃなかった？ 早く行ったほうがいいわよ。

ポーシャー

そこに立っていられると、お客さんがみんな逃げちゃうわ。

レヴィ

はい。ポーシャー店長。

レヴィ

……

ポーシャー

はあ、本当に行っちゃったわね。

ポーシャー

まあ、よかったのかしら。レヴィがカウンターに座ってぐずぐず言ってるのを聞くのも嫌だったし。

ポーシャー

数日も無断欠勤した上に、事前連絡なしで逃げたんだから……今月のアルバイト代は払わなくてもいいわよね？

ポーシャー

……はあ〜。新しいアルバイト募集のチラシ、結局使うことになるのね。

ポーシャー

それじゃあ、ひとまず……。

ポーシャー

ついでに、私の論文の中でレヴィが参考文献に使えそうなものを、バリエに渡してもらおうかしら？

ポーシャー

見てないふりはしたけど、実はそれなりに読める内容だったから、少し読んじゃったのよね〜。

CHAPTER 8

終わりの向こうには

マカシャ

わあ、レヴィの論文がついに通ったんだね。ねえ、論文は読んだ？

フリックル

ふん。レヴィが正式な魔女になるという衝撃で、頭でもおかしくなったのか、マカシャ。

フリックル

その論文を最終審査したのは私だぞ。

マカシャ

フリックルには聞いてないからいいよ。

フリックル

な、何だと！？

マカシャ

シェラムはどう？ 読んだ？

シェラム

それなら読みましたよ。なかなか面白かったですね。

マカシャ

だよね、だよね？ いや〜、本当に驚いたよ。材料を探す方法に、あんなものがあったなんて。

マカシャ

私もさっそく恩恵を受けたよ。あの論文を読んでから、採集が何倍も早くなったんだ！

シェラム

たしかに、ポーション店のアルバイトの秘訣だからでしょうか。目的に合った植物の探し方なども、かなり詳しく書かれていましたね。

シェラム

もしかすると、他のアルバイトの秘訣もたくさん隠しているのでは？

マカシャ

それはあり得るね！ レヴィの論文は、今後も注目する必要があるかもしれないな。

シェラム

とにかく、理論も形式も文句なしでしたし、よい論文でしたよ。

フリックル

そこが一番驚くべき点だ。やはり女王陛下の目は正確だったのか……。

フリックル

一週間以内に、本当に理論面まで補ってくるとはな。

フリックル

アルバイトばかりしている魔女だと思っていたが、そういうわけでもなかったらしい。

マカシャ

今まで数えきれないほど論文を読んで書いてきただろうから、ある程度の勘はあったんだろうね。

マカシャ

アルバイトの合間に少しずつ勉強していたとはいえ、それを長い間続けてきたわけだし……。

マカシャ

努力の総量は、とっくに臨界点を超えていたんだろうさ。

マカシャ

今回の論文の出来を見るに、ちょっとしたきっかけさえあれば、すぐに正式な魔女になれた子だったんだと思うよ。

マカシャ

もちろん、そのきっかけを与えたのは、このマカシャだけどね！ いひひっ。

シェラム

そうでしょうか？ レヴィは図書館で、フリックルがサツマイモ揚げから赤キャンディが出てきたくらい驚くような論文にしてやる、と燃えていましたよ。

シェラム

具体的にどんな暴言を受けたのかは知りませんが、きっかけになったのはフリックルでは？

フリックル

暴言だと？ ただ事実を言ってやっただけだ。

フリックル

研究もまともにせず、アルバイトばかりしていて、よい論文が書けるのかとな。

フリックル

その程度の理由で赤キャンディがどうしただと？ まったく。

マカシャ

それはただ煽っただけだよ！ 論文の題材のヒントを得たのは、私のおかげだったはずだ！

マカシャ

私と話したとき、たしかに「何か分かった気がします」って言ってたんだから！

シェラム

それで、どうですかフリックル？ 一泡吹かされた気分は？

フリックル

一泡吹かされたものか。論文が一つ通ったくらいで。

フリックル

ようやく正式な魔女になっただけだ。レヴィはまだまだこれからだ。

シェラム

フリックルにしては高評価ですね。まだ伸びしろがあると見ているわけですか？

フリックル

好きに受け取れ。

卒業式会場

ベリータ

皆、揃っているようだな。

フリックル

お越しでしたか、女王陛下。

ベリータ

うむ、フリックル。準備は整っているか？

フリックル

はい、女王陛下。すべて準備は完了しております。いつでも始められます。

ベリータ

よし。すぐに始めよう。皆、席に着くように。

フリックル

はい、女王陛下。

ベリータ

見習い魔女の卒業式を執り行うのは、実に久しぶりだな。

ベリータ

それに、卒業する魔女がレヴィとは。今日はなかなか意義深い日になりそうだ。

ベリータ

では……。

ベリータ

これより、魔女レヴィの卒業式ならびに学位授与式を執り行う。

ベリータ

レヴィ。壇上へ。

レヴィ

はい、女王陛下。

ベリータ

魔女学位取得認定証。正式魔女レヴィ。

ベリータ

我、魔女女王ベリータは、魔女レヴィの学術的成果と、これに対する魔女学会の認定に基づき……。

ベリータ

魔女レヴィの学位取得を認め、正式な魔女に任命する。以上。

ベリータ

これまでよく励んだな、レヴィ。これからも精進するように。

レヴィ

ありがとうございます、女王陛下。

レヴィ(心の声)

ついに卒業。これ、まさか夢じゃないよね？

レヴィ(心の声)

私もついに……正式な魔女になったんだ！

卒業式の後

バリエ

卒業おめでとう、レヴィ。

レヴィ

バリエ！ 来てくれてたんだ！

バリエ

当然でしょ。レヴィの卒業式なんだから。

バリエ

こんな日が本当に来るんだね。

レヴィ

そうだね。ありがとう、バリエ。

レヴィ

本当に……いろいろと。

バリエ

私が何をしたっていうの。全部、君が頑張ったからでしょ。

バリエ

私は誰よりもよく知ってるよ。君が今まで、どれだけ頑張ってきたか。

バリエ

いつも、君の論文を確認してきたんだから。

レヴィ

それも、ずっとありがたいと思ってたけど……。

バリエ

形式の確認もしてあげてたら、もう少し早く卒業できたんじゃないかって？

バリエ

それはないよ。あの論文たちは、そのくらいの出来じゃなかったから。どうせ落ちるものばかりだった。

バリエ

でも、少しずつよくなっているのは見えていた。

バリエ

もしかしたら、そろそろ時期なのかもしれないとは思ってたよ。

バリエ

それが、今日だったんだね。

バリエ

それで、これからどうするの？

バリエ

正式な魔女になったあと、自分が何をしたいか考えたことはある？

レヴィ

うーん、まだよく分からない。今まではアルバイトばかりしてきたから。

レヴィ

こうして卒業はできたけど、まだまだ私は未熟だって気持ちのほうが強いし……。

レヴィ

何をすればいいのか、どう生きればいいのかも、正直まだ分からない。

レヴィ

でもね、こうは思うんだ。

レヴィ

これから私が何をするにしても、それは無駄な時間にはならないんじゃないかって。

レヴィ

私は今まで、アルバイトばかりしながら、たくさんの年月を過ごしてきたでしょ。

レヴィ

でも、その時間も無駄じゃなかったって、今なら言える。

レヴィ

アルバイトをしながらも、ずっと正式な魔女になることを夢見てきたし、その中で確かに学んだものがあるから。

レヴィ

何をするかが大事なんじゃない。

レヴィ

その中で、何を考えて、何を学ぶか。

レヴィ

それを忘れなければ、これからも大丈夫だと思う。

バリエ

これが……正式な魔女？ 急にまったく別の魔女になったみたいなんだけど？

レヴィ

そう？ 私も少しは……かっこよくなった？

バリエ

うん、すごく見違えたよ。誰かと思ったくらい。

レヴィ

フ、フリックル様！？

フリックル

卒業おめでとう、レヴィ。

レヴィ

あ、ありがとうございます、フリックル様。

フリックル

挨拶はいい。

フリックル

それで、どうだ？ 恨みは少し晴れたか？

レヴィ

恨み……ですか？

フリックル

私に一泡吹かせてやると、ずいぶん燃えていたそうじゃないか。

フリックル

私を恨んでいたんじゃないのか？

レヴィ

恨んで……いたこともありました。

レヴィ

アルバイトばかりだって、私のことを見下していましたから。

レヴィ

でも今は……少し、感謝もしています。

フリックル

感謝？ 何にだ？

レヴィ

なんというか……いろいろです。

フリックル

ふん。今度は賄賂すらなく、口先だけの感謝で策を巡らせようというわけか。正式な魔女になったからといって調子に乗るなよ。

フリックル

正式な魔女になっても、お前が魔女の中で一番の末っ子である事実は変わらない。

フリックル

見習い魔女だったから任せられなかった仕事が、山ほどあるんだ。

レヴィ

ううっ！ 正式な魔女になっても、楽には暮らせないんですか？

バリエ

今まで私を見て、何も感じなかったの？ 正式な魔女でも、みんなそんなものだよ。

レヴィ

そ、そんなはずない！ 私の年金生活の夢が……！

フリックル

それだけで食べていける時代など、とっくの昔に終わっているというのに、まだそんなことを言っているのか！

フリックル

アルバイトばかりしていたせいで、時代感覚まで遅れすぎているんじゃないか？

フリックル

今からでも、少しは社会経験を積んだほうがいいな。

レヴィ

あの、退勤時間は……保証されるんですよね？

フリックル

やってみれば分かる。契約形態によるからな。

フリックル

もし王宮の仕事に就くなら、私がよく見てやるとしよう。楽しみにしているといい。

レヴィ

だ、だめです！ お願いします！！

レヴィ

定時退勤だけは保証してください！！！

イベント画面スチル